

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

## ベーリングの第一次カムチャツカ探検とシベリア図：ロシア国立歴史博物館所蔵のシベリア図を中心として

KOMEIE, Shinobu / 米家, 志乃布

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

64

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

66

(発行年 / Year)

2012-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007769>

# ベーリングの第一次カムチャツカ探検とシベリア図

— ロシア国立歴史博物館所蔵のシベリア図を中心として —

米 家 志乃布

## はじめに

本稿の目的は、ベーリング探検隊による第一次カムチャツカ探検（1725～1730）の成果と関わりとされる手書きのシベリア図を取り上げ、そこに描かれているシベリア地域の特徴について論じることから、ロシア地図史における本地図の位置づけを考察することにある。

ベーリング探検隊による2回のカムチャツカ探検（1725～1730、1733～1742）とその情報に基づいて作製されたシベリア図については、今まで様々なロシア地図史に関する文献で取り上げられてきた<sup>(1)</sup>。ベーリングの2回のカムチャツカ探検については、アジアとアメリカの間にあるとされる幻の「アニアン海峡」を確認したとされ（ベーリング探検隊の功績により後世にベーリング海峡と名付けられた）、第二次探検（「大北方探検」とも云われる）では、壮大な規模の学術調査が行われ、北極海沿岸地域の空白を埋めたことから、地図史研究の上では評価の高い功績である。

第一次探検の成果は、ピョートル一世によって与えられた課題——「アニアン海峡」の確認——を必ずしも解決していなかったとされ、同時代においても後世においても、あまり評価されていないとされている<sup>(2)</sup>。しかし以前から、地図史上では、この第一次探検について興味深い事実が指摘されている。

第一次カムチャツカ探検に関して、ベーリングは、その成果として地図と報告書を皇帝に提出したのみで、ロシア国内においては出版物としては

残さなかった。ところが、1735年にパリで刊行されたダンヴィルの図（後掲図5）は、ロシアから持ち出された第一次カムチャツカ探検の成果によって作製された地図の複製であったのである<sup>(3)</sup>。また、キリーロフ作製の1734年のロシア帝国アトラスのなかに所収されているロシア帝国全図のシベリア部分にも、この第一次カムチャツカ探検の成果が取り入れられた<sup>(4)</sup>ため、続く様々な当該地域の出版地図においてもその情報は利用され、広く知られることとなった。

このように、第一次カムチャツカ探検の成果は印刷され流布した地図によって18世紀前半の同時代にも後世にも広く知れ渡ったものの、18世紀においてはなお、シベリア図には「手書き」の一枚物の地図が多いのが現状である。第一次カムチャツカ探検関係のシベリア図も、後述のように、現在、いくつかの「手書き」地図の存在が確認できる。

しかし、これらの地図については、ロシア語文献のみに紹介されているにすぎず、しかも後述のナプロート（М. И. Наврот）論文以外は、断片的な記述が多いことが特徴である<sup>(5)</sup>。管見の限り、従来のロシア地図史を扱った日本語文献では紹介されておらず、このような「手書き」地図の存在およびそれらの位置づけを再検討することは、18世紀のロシア地図史を研究するうえで重要な作業のひとつであるといえよう。

そこで本稿では、実際に、ロシア国立歴史博物館地図部（ОК ГИМ）が所蔵しているシベリア図コレクションのなかから、ベーリング探検隊のチリコフ（А. И. Чириков）の側近だったチャップリ

ン(П. А. Чаплин)が作製したとされる手書きのシベリア図に注目する。その複製図3枚(目録番号ГО 1882/3, ГО 1882/4, ГО 7712)のなかでも、オリジナルに最も近いと考えられる図1(ГО 1882/3)を中心に、そこに描かれているシベリア像の特徴を検討する(II章)。そのうえで、バリエーション間の比較をし(III章)、最近のロシア地図史における「民族地図」研究のなかでの本図の位置づけについて紹介しながら(IV章)、先行研究を踏まえたうえで、筆者なりに、本図の位置づけを整理してみたい。

## I. ロシア国立歴史博物館所蔵のシベリア図について

ロシア国立歴史博物館地図部が所蔵するシベリア図の複製図は3枚ある(目録番号ГО 1882/3, ГО 1882/4, ГО 7712)。前2者(ГО 1882/3とГО 1882/4)はまったく同じ地図図である。つまり、この2つの地図は、オリジナルの地図図が同じ地図図であると思われる(もしくはどちらかがどちらかを模写したか?)。後者(ГО 7712)は、前者の地図図にさらにカバーする地域を拡大し、情報量を増やして書き込んだものであると思われる。以下、便宜的に前者の地図図をA図(ГО 1882/3・図1)、A'図(ГО 1882/4)、後者の地図図をB図(ГО 7712)とする。

エフィーモフ(A. В. Ефимов)の編集したアトラス<sup>6)</sup>では、ロシアで作製された主要な地図図が年代順に並んでいることが特徴である。ロシア地図史全般についての解説論文はついているものの、A図<sup>7)</sup>・B図<sup>8)</sup>ともに簡単な紹介のみである。A図については、チャップリン自筆の地図図であるとしている。

その後、国立歴史博物館地図部に勤務していたナブロートによって、博物館所蔵図に関する論文が発表され、これが現在もっともこの地図図について詳細なものである<sup>9)</sup>。ナブロート論文では、ロシア国立歴史博物館所蔵のこれらのシベリア図は、作製者不明ではあるものの、チャップリンの地図

のバリエーションと位置づけ、その作製者および管理者を「測地学の教師」クラシリニコフ(В. Красильников)と推定する<sup>10)</sup>。

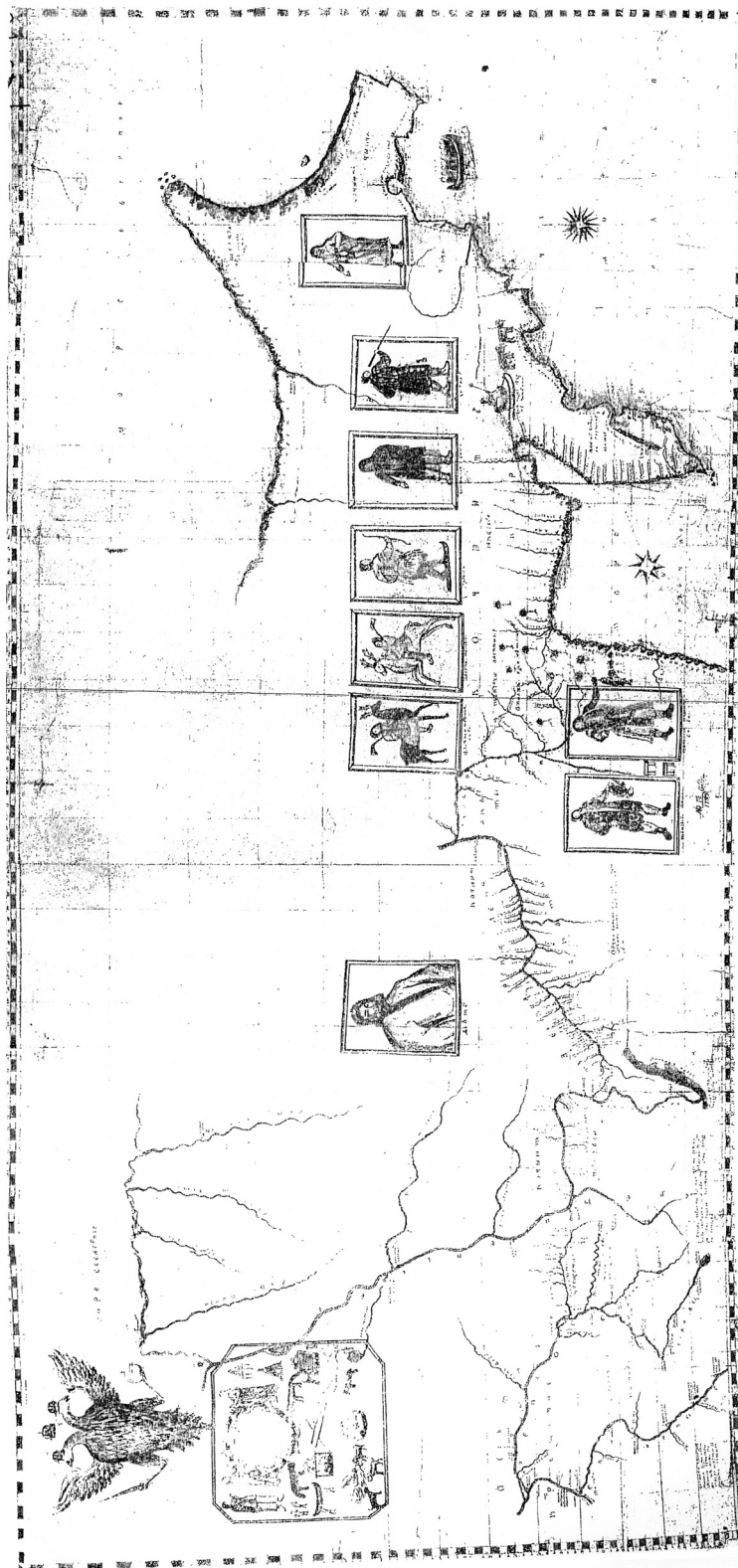
これらのシベリア図は、ロシア国立歴史博物館の「シベリア図コレクション」の18番目として整理されており、目録によれば、A図は1753年作製、B図は1757年作製とある。A図・B図いずれも作製者に関する記載はない。しかし、明らかに第一次カムチャツカ探検によるチャップリン(ロシアの士官候補生、ベーリングの第一次探検に同行)の地図の複製のひとつであるとナブロートは述べている<sup>11)</sup>。その理由として、バリエーションのひとつであるゲッティンゲン大学所蔵図にチャップリン作製であることが明記されていること、ロシア科学アカデミー図書館所蔵図にも「測地技師イワン・ハニコフの描いた地図図をもとに、海軍少尉ピョートル・チャップリンが描いた」と記述されていることを挙げている<sup>12)</sup>。

チャップリンの地図図の複製は、現在16点(すべて手書き、ロシア5、スウェーデン5、パリ3、コペンハーゲン1、ロンドン1、ドイツ1)が存在する。そのうちの4つにシベリア諸民族の絵がある<sup>13)</sup>。ロシアの所蔵機関は、モスクワのロシア国立歴史博物館のほか、モスクワのロシア国立古代文書館(РГАДА)、サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー図書館文書部(ОР БАН)であるという<sup>14)</sup>。なかでも、ドイツのゲッティンゲン大学所蔵図は、ロシア歴史博物館所蔵図のバリエーションであると位置付けられている<sup>15)</sup>。

なお、これらロシア歴史博物館所蔵のシベリア図は、筆者の調査によれば、他の2つの地図図と一緒に博物館で保存されていた。ひとつは、クラシリニコフ作製の地図図(1777年)、もうひとつはクック探検隊が作製した地図図(1779年)である。いずれも手書きの一枚ものであり、ロシア地図史上、重要な地図図とされている<sup>16)</sup>。

ナブロートによれば、ベーリングのカムチャツカ探検の成果を反映した地図図は、ロシア歴史博物館所蔵のほかのシベリア図にも影響を与えており、そのひとつの地図図にあるカルトゥーシュのなかに

ベーリングの第一次カムチャツカ探検とシベリア図



(Ефимов, А. В., (ред.) Атлас географических открытий в Сибири и в Северо-западной Америке XVII-XVIII вв. Москва 1964, No. 66 より引用)

図1 ロシア国立歴史博物館所蔵のシベリア図 (A 図) (所蔵番号: ГО 1882/3)

「オリジナルの地図と目録でワシリー・クラシリニコフが作製し描いた」とあるという<sup>(17)</sup>。クラシリニコフは、第一次・第二次カムチャツカ探検の地図や資料を集めていたため、それをもとにこのシベリア図を編集することができた。それゆえ、この地図の作製者および管理者を、クラシリニコフであると推定している<sup>(18)</sup>。しかし現段階では、直接の証拠がないうえに、ナプロートが述べているコンテキストのみでは、クラシリニコフがこれらの地図の作製者であるとは断定できないと考えており、さらなる検討の余地が残されているといえる。

また、これらシベリア図の複製の作製目的については、従来の研究において明確に述べられているものはない。これは、作製目的を述べた直接の証拠が存在しないことによると思われる。つまり、直接の証拠となるような地図作製・複写に関する文書が存在しない以上、それを補うためには、コンテクスチュアルなアプローチが有効であろう。それゆえ、シベリア図に描かれた地域の特徴や他のバリエーションとの比較などを踏まえたうえで考察する必要があると思われる。

このことから、本図の作製者の推定および作製目的を、地図に描かれた内容や特徴を詳細に検討し、なおかつバリエーション間の関係を考察することによって手がかりをつかむ試みをしたい。その際、次章では、B図よりもよりチャップリンの作製したオリジナルの地図に近いと思われるA図を主な対象として考察することにしたい。

## II. シベリア図の内容と特徴

### (1) ベーリング探検隊の行程と地図作製に利用した情報

A図では、主要河川（オビ川、エニセイ川、レナ川など）沿いに詳細な記載があり、河川名・集落名・城塞名などが書き込まれている。まずは、A図の内容がそもそもベーリング探検隊の行程と一致するのかどうか、検討してみたい。そこで、ベルグの記述<sup>(19)</sup>をもとに、第一次カムチャツカ

探検のシベリア・極東での行程について確認しよう（以下の記述はベルグ著書の翻訳をもとに編集、行程上の地名については図2を参照）。

ベーリング一行は、1725年3月16日トボリスク到着、イルティシ川・オビ川の水路を利用してケチ川河畔のマコヴィスク城塞に入った。それから陸路でエニセイスクへ移動した。その先は再び水路を使い、エニセイ川・ツングースカ川を通過して、1725年9月25日にイリム川河畔のイリムスク到着、そこで越冬した。

翌1726年春に出発、レナ川を下り、1726年6月ヤクーツクに到着した。ヤクーツクからは陸路でオホーツクに向かい、ベーリングは荷物より先に10月1日に到着し、荷物はそのあと10月中旬に到着した。

翌1727年6月30日出航、9月4日にポリシェレツクに到着した。1728年1月ヴェルフニカムチャツクへ移動、3月にニージニカムチャツクへ、その後7月13日にカムチャツカ河口を離れて、7月29日にアナディリ河口を通過、8月9日から11日までの間にチュクチ岬を廻航した。8月15日には北緯67度18分に達し、探検の目的は果たしたとして引き返した。9月1日には再びカムチャツカ河口に帰港、その年はニージニカムチャツクで越冬した。

翌1729年6月、ベーリングはここからアメリカへ渡ろうとして6月5日出発したものの、6月8日には濃霧のため引き返した。その後、カムチャツカ南端のロパトカ岬を廻航して、それを地図に記入し、7月2日ポリシャヤ河口に入り、7月23日にオホーツクに帰還した。8月29日ヤクーツクに到着、1730年3月1日にペテルブルクへ戻った。その際、地図と簡単な報告書を提出したとされる<sup>(20)</sup>。この時に提出された地図が、チャップリン作製の地図であろう。

この行程と地図に書き込まれている河川・地名などを照合する（図2のトレース図）と、ベーリングのたどったルートとシベリア地域の描かれている部分はほぼ一致する。特に、長期間滞在したとされる都市や城塞はすべて地図上に示されている

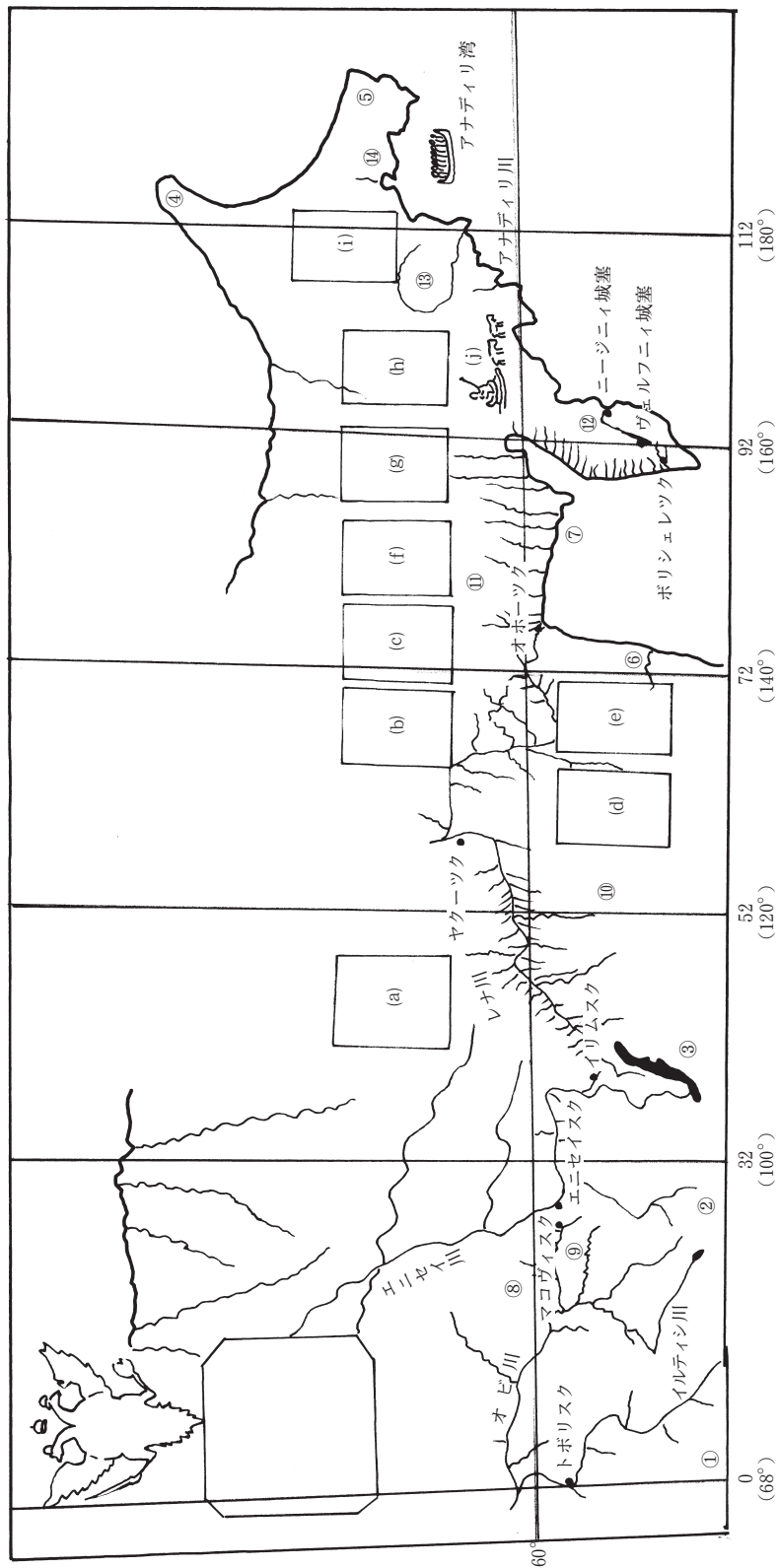


図2 図1のトレース図 (トレースは筆者による)

ることがわかった。しかし、一方で、ベーリング探検隊が通っていないはずの河川や地名も書き込まれている。

そこで地図内の書き込みについて見てみると、

- ① 「トボリスクまでのイルティシ川の上流およびそこに流れ込む河川、知られている場所については測地技師プチロフ（Путилов）の地図に描かれている」
- ② 「エニセイ川の上流から河口と海岸部まで、オビ川の上流およびその流れ込む河川、私たちのルート以外については測地技師チチャゴフ（Чичагов）の地図に描かれている」
- ③ 「測地技師シャティロフ（Шатилов）の地図に描かれている」
- ④ 「これは以前の地図と新しい報告書によるシェラギンスク（Шелагинск）およびチュコーツク地域の一部である」
- ⑤ 「高い岩石の山、冬が終わるまでは毎年通り抜けることはできない、険しい岸壁および小さくはない丘などと同じく海に隣接する多くの場所がある」
- ⑥ 「以前の地図および報告による」
- ⑦ 「報告による」

とある。②の下線部にもあるように、ベーリングの行程とは外れた場所については、他の情報を利用して、地図上に書き込んだことが示されていることが明確である。また、A図上に書き込みはないものの、カムチャツカ半島とオホーツクの沿岸部分に関しては、その形態や描き方などから、明らかに測地技師エフレイノフの作製した地図（1722年）であることもわかる<sup>(21)</sup>。

さらに、書き込みの①②に注目すると、これらはA図にのみ存在するのではなく、チャップリンの図の他のバリエーションにも存在する。たとえば、ロシア国立古代文書館が所蔵する地図にも、同じ部分に①②の書き込みがある<sup>(22)</sup>。また、ナプロートによれば、⑤の書き込みこそが、このA図の作者が、カムチャツカ半島、アナディリ湾、チュコト半島およびデジネフ岬などについて、以前のシベリア図やこの地域の情報を十分に得ていると

いうことを示していると述べられている<sup>(23)</sup>。なかでも、A図においてさらに注目すべき点は、ベーリング探検隊の調査船「聖ガブリエル号」の存在であり、調査船が調査したであろうアナディリ川～アナディリ湾～チュコト半島沿岸にかけて示されている海深の測定ポイント（地図上に全部で26ポイントが存在する）が重要であることも指摘している<sup>(24)</sup>。

現在、残存している複製図から推定すると、チャップリンが作製したオリジナルの地図にも、描かれた情報の出所を示す同様の書き込みが複数存在したのではないかと思われる。しかし、これらの書き込みが存在しない複製図もあるため、模写を繰り返されるたびに、書き込み部分が欠落したケースも考えられよう。それゆえ、歴史博物館所蔵のA図に、チャップリン作製のオリジナルとまったく同じ個所に書き込みが存在しているのかどうかは確認できない。しかし、複数ある複製図のなかでは、ベーリング探検隊のルートとそれ以外の情報が明確に分かれている点で、比較的オリジナルの地図情報に近い地図なのではないかと予想できる。

つまり、A図が、ベーリング探検隊の行程とそれ以外の部分について、当時すでに作成されていた地図や報告書を編集して作製した「編集図」であること、それはロシア皇帝に提出されたオリジナルな地図においてもおそらく同様であったのではないかと推定した。

しかし、もうひとつ重要な点は、チャップリンのシベリア図のバリエーションには、大きく分けて2つのタイプがあるということである。ひとつは、シベリア諸民族の肖像と分布が書き込まれている地図、もうひとつは、そうではない地図である。

## (2) シベリア民族の描写

ロシア国立歴史博物館所蔵のA図（図1）においてもっとも特徴的なことのひとつは、東シベリアからカムチャツカにかけての民族の図像が、地図上に描かれていることであろう。トレース図である図2を見ると、左から(a)ヤクート、(b)(c)(d)(e)

ツングース、(f)コリャーク、(g)カムチャツカの女 баба、(h)クリール、(i)チュクチがそれぞれ枠に入ったかたちで上半身もしくは全身で、肖像図として描かれている。また、枠には入っていないが、犬橇を引いたカムチャダール(j)も描かれている。

しかし、シベリア民族に関する地図上の情報は、民族の肖像図だけではない。その他、地図上の書き込みについて見てみると、

- ⑧ 「洗礼を受けたオスチャク」
- ⑨ 「新しく洗礼を受けたタタール」
- ⑩ 「ビティマ川からレナ川下流は遊牧ヤクート、ここは遊牧ツングースの地である」
- ⑪ 「ユカギール」
- ⑫ 「様々な言語を話すカムチャダールの住む地である」
- ⑬ 「チュクチ」
- ⑭ 「遊牧チュクチ」

など、民族の分布についての書き込みも存在することがわかる。

プサンチン(A. В. Псянчин)は、この⑫のカムチャダールについての書き込みを、第一次ベーリング探検隊の成果としての本地図の意義を考えると、もっとも重要視している<sup>(25)</sup>。

また、地図の左上のカルトゥーシュとその外側には、シベリア民族の風習が描かれている(図1参照)。先住民族の男女の姿が描かれ、その周囲に日常の風景や火葬の状況、食糧の貯蔵方法、さらに狐・クロテン・鹿などの動物の絵が並んでいる。ナブロートによれば、これらはカムチャダール(現在名・イテリメン)を描いたとされている<sup>(26)</sup>。ベーリングが1730年に提出した報告書のなかには、ヤクートとカムチャダールに関する資料が掲載されていた。なかでも、カムチャダールの習慣に関しては、詳細な記述があった<sup>(27)</sup>。この地図上の左上の描写は、そのベーリングの記述に即して、描かれ表現されたものと推察できよう。

### (3) 地図の正確さと描かれた土地の形態

A図には経緯線に対応すると思われるグリッド線が地図全体に引かれていることが特徴である。

そこで、まずは経度について現在の地図と比較してみる(図2・図3参照)。トボリスクを0度として目盛りが始まっているので、そこから現在の経度に当てはめ(東経100度・120度・140度・160度・180度)、現在のシベリア・極東の位置を考えると、おおざっぱではあるが、おおよその位置は正しいことがわかる。緯度については、起点であるトボリスクの上方に北緯60度の線があるので、それを比較してみても、60度近辺についてはやはりおおよその位置は正しい。しかし、特にレナ川北部から太平洋沿岸地域までの位置については不明なのであろう、空白部分が多く、A図では、そこには前述のように民族の肖像図が描き込まれていることが特徴的である。

つぎに、陸地の形態をみると、カムチャツカからチュコト半島にかけての沿岸部はかなり正確に描かれていることがわかる。しかし、チュコト半島そのものの表現については、非常にいびつなかたちをしており、正確なかたちとはいえない。しかも、チュコト半島以北については、突出した「シェラギンスク」という現実には存在しない形態をした岬(現在のシェラギンスキー岬に比定)が描かれていることが特徴的である。

ところで、第一次カムチャツカ探検の成果を取り入れたこの地図は、1733～1734年にかけて出版された「ロシア帝国地図」(『ロシア帝国アトラス』所収)において参考資料とされたため、キリーロフの地図にもこれらの特徴が反映されており、その後のロシア科学アカデミーのロシア帝国図(1745年)にも同様の特徴がみとれる<sup>(28)</sup>。

ロシアの地図史におけるチュコト半島および「シェラギンスク」の形態の修正はいつごろだったのだろうか。これについては、エフィーモフのアトラスに掲載されているシベリア・極東地域の地図を確認していくと、クックの地図が決定的であったことがわかる<sup>(29)</sup>。このクックの地図は、クック探検隊の作製したオリジナルの地図(クックはすでに死亡していたが、1779年にペトロバブロフスクに入港した時にロシアに渡されたクック探検隊が作製した地図)の複製であるという<sup>(30)</sup>。そ



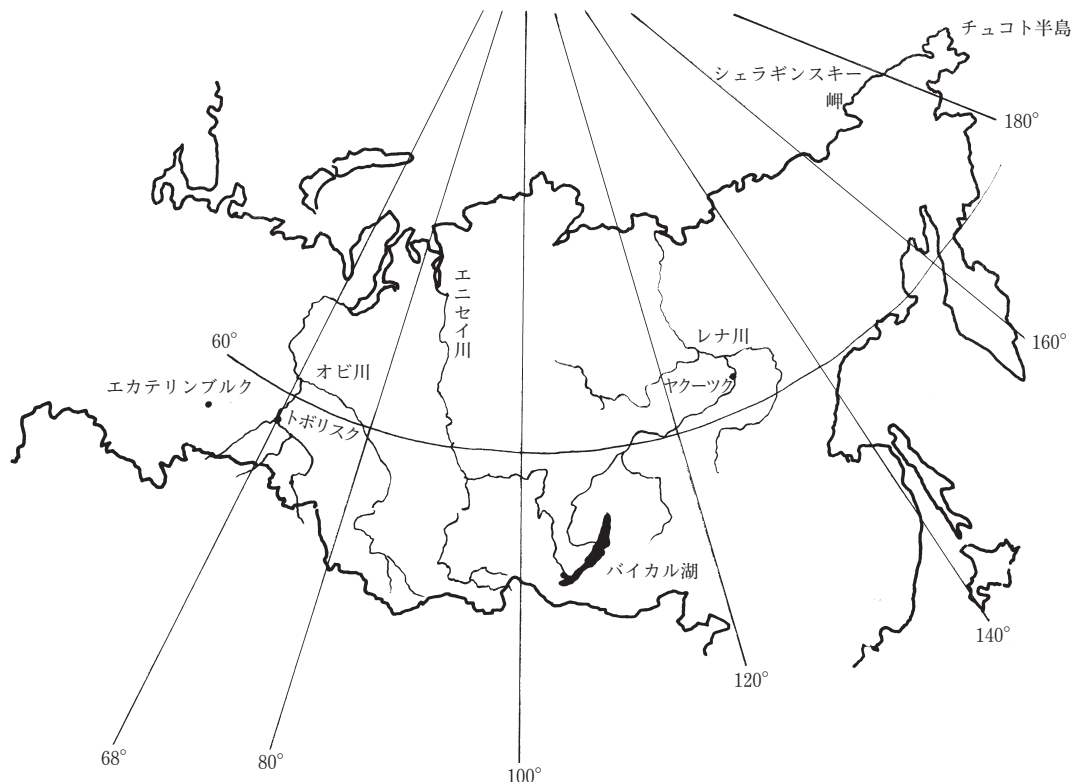


図3 現在の地図におけるシベリア・ロシア極東

れゆえ、当該期におけるもっとも最新の情報が反映された地図といえる。このクックの地図以降、ロシアで作製された地図において、チュコト半島の形態は以前と比べて格段に正確になっていったのである。

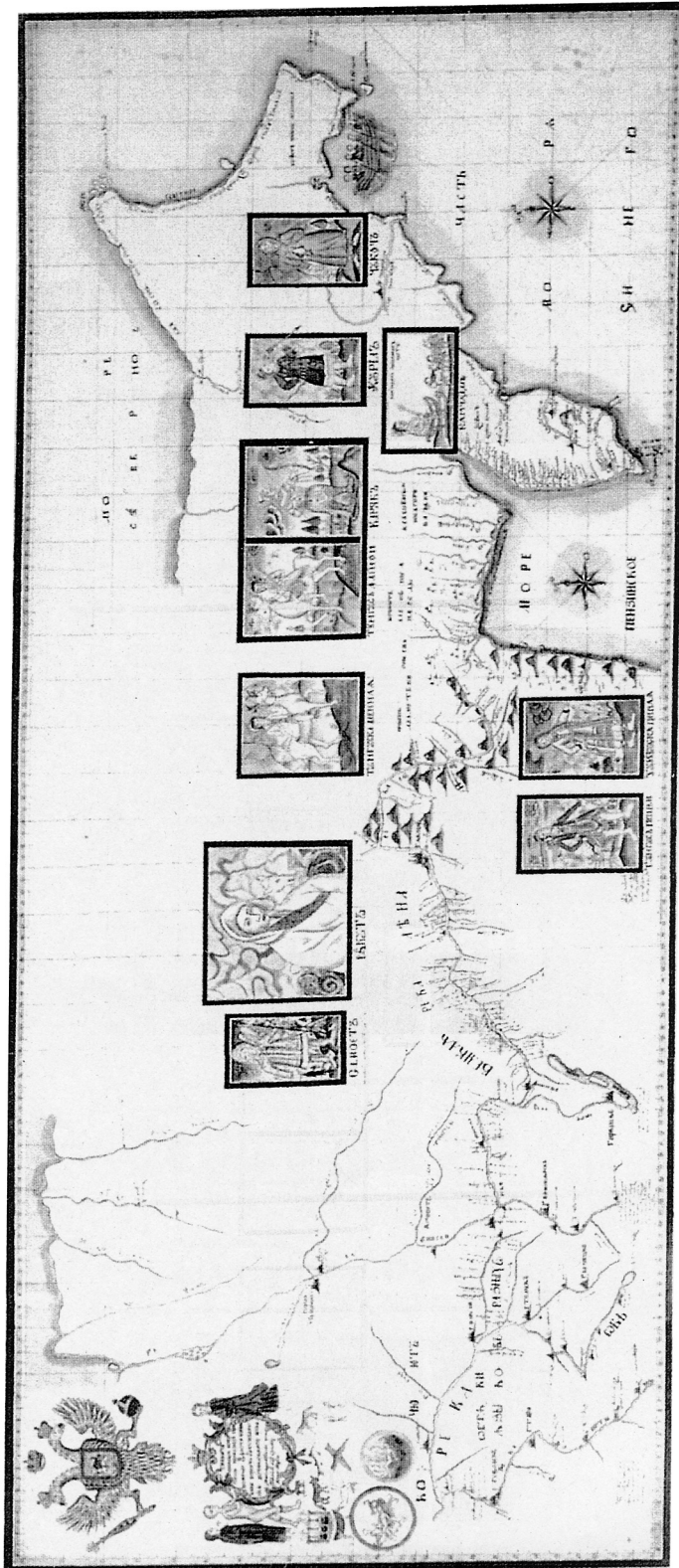
### Ⅲ. シベリア図のバリエーション間の比較

#### (1) 民族の肖像図が存在する図の所蔵経緯

シベリア民族の肖像図がある地図として、ゲッティンゲン大学所蔵図(図4)、ロシア国立歴史博物館所蔵のA図(図1)・A'図・B図は確認できた。ナブロート論文中では、シベリア民族の肖像図が存在する地図は「4点」としており、ロシアには歴史博物館のものだけであると述べている<sup>(31)</sup>。しかし、エフィーモフのアトラスに掲載されている65番のシベリア図は、明らかにチャップリン作製のシベリア図であり、そこにはシベリ

ア民族の図像が存在する<sup>(32)</sup>。この65番のシベリア図は写真によるコピーであり、その原本はストックホルムにあるスウェーデンの国立図書館であると説明されている<sup>(33)</sup>。そこで、ストックホルムの国立図書館所蔵図(図5)もこれに該当するとすれば、「5点」となる。ナブロートがこれについて見落としていたとは考えられないので、ロシア国立歴史博物館所蔵のA'図は、A図とまったく同じ図であることから、それをナブロートが総点数に数えていなかったと想定できよう。

各シベリア地図の所蔵の経緯について確認する。Meeting Frontier<sup>(34)</sup>の解説によれば、ゲッティンゲン大学所蔵図(図4)は、「1729年にチャップリンが作製した地図——その地図には複製がいくつか存在するが——と推測される地図である。この地図はベーリングによって報告書と同時に1730年ペテルブルクにおいてロシア当局に提出された。1777年にドイツ人将校のアッシュがペ



(Gmelin J. G. Expedition ins unbekannte Sibirien, Sigmaringen Thorbecke, 1999, 第5図より引用)

図4 ゲッティンゲン大学図書館所蔵のシベリア図

テルブルクからゲッティンゲンに送ったものである」とある。

ストックホルムの所蔵図(図5)は、バグロフの論文で紹介されている<sup>(35)</sup>。この地図は、エフィモフの編集したアトラスにも掲載されており(図5参照)、ロシア国立歴史博物館所蔵のA図に地図の画像がよく似ている。所蔵の経緯については、現段階では未調査である。

A図の所蔵されているロシア国立歴史博物館は、モスクワの中心部にある赤の広場に隣接し、1872年に設立された博物館である。地図部は1919年につくられ、17世紀から20世紀にかけての様々な地図コレクションがある。地図部の設立が革命後であるということを考えると、図1(A図)・A'図・B図は、当時の首都であるサンクトペテルブルクから革命後にモスクワに移され、その後整理された可能性はある。それゆえ、ストックホルム所蔵図(図5)もロシア国立図書館所蔵図(図1)も、ゲッティンゲン大所蔵図(図4)同様に、サンクトペテルブルクにおいて、チャップリン作製のオリジナルあるいはその複製から模写され、現在の所蔵先に移された可能性は高い。

そもそも、フランスで1735年に出版されたデュアルドの『シナ帝国誌』において、1732年にダンヴィルによって作製されたベーリングの第一次探検による成果図の模写が掲載されている(図6)。著者であるデュアルドの説明では、このベーリングの地図と報告書は、誰であるかは明示されていないが、ある人からポーランド王に送られ、王からデュアルド本人に送られたものであるとされている<sup>(36)</sup>。そして、この地図と報告書は、ベーリングが1730年に皇帝アンナ・イワノヴナに献上したものと同じものであるという<sup>(37)</sup>。

ベーリングによって地図と報告書が提出された時から4年前、1726年にヤクーツクのコサック頭領であるショスタコフは、ヤクーツクからペテルブルクを訪れ、カムチャツカ半島および東シベリアを描いた地図を提出した。このショスタコフの地図は、ロシア科学アカデミーのドイツ人教授ミュラー(ロシア名:ミルレル)もロシア帝国

全図の作製を指揮したフランスの天文学者・地理学者であるドゥリールも所有していたことがわかっている<sup>(38)</sup>。また、ミュラーは、当時のペテルブルクにおいて、「ショスタコフの地図と称して各種の地図」が広まっていたとも言っている<sup>(39)</sup>。その後、このショスタコフの地図のオリジナルは、ロシア人地図史研究者のバグロフが所有していたことも明らかになった<sup>(40)</sup>。

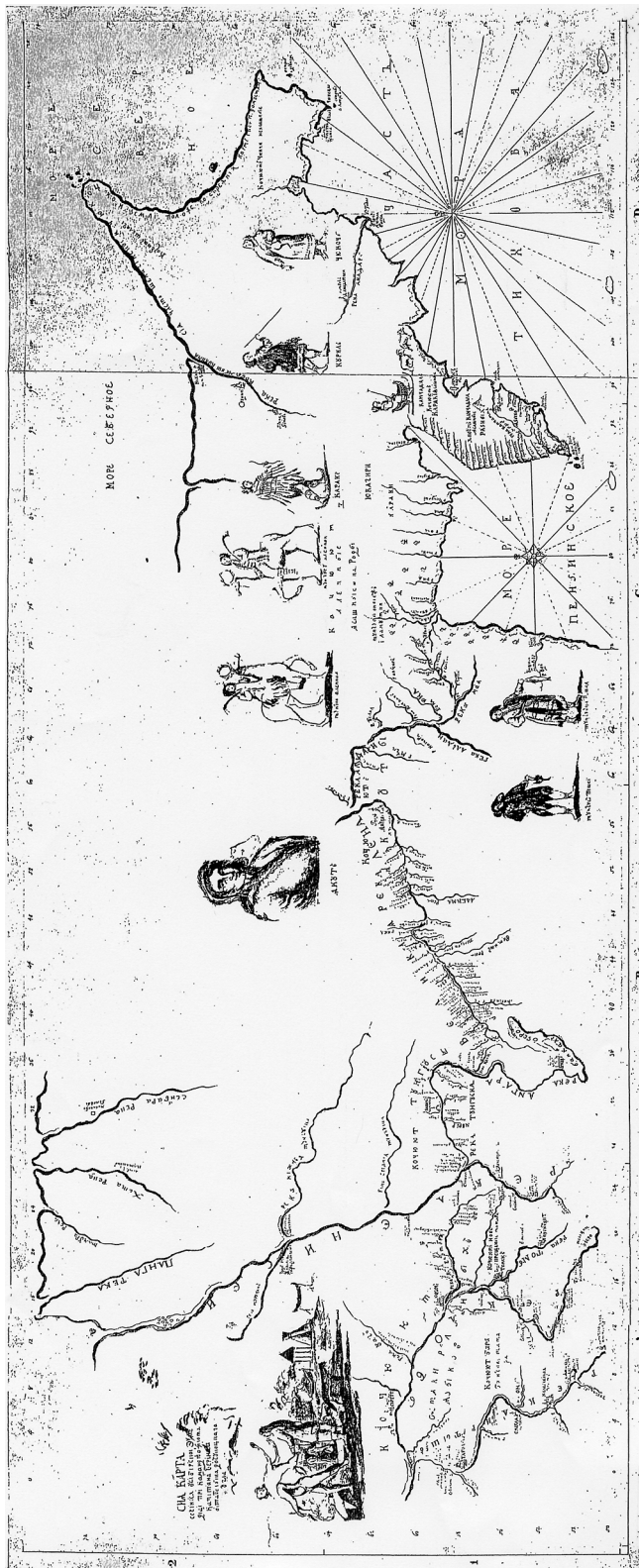
つまり、当時のペテルブルクの知識人層において、これらの地図や報告書の原本を閲覧する機会があった、あるいは模写する機会があったのではないかと推定できる。ベーリングの報告書につけられたチャップリンの地図は、当時のペテルブルクの知識人層に広まっていたのではないだろうか。

## (2) 民族の肖像図の違い

図5をみると明らかであるが、この地図にはシベリアの民族の描写はなく、これがよりオリジナルに近いかたちであるとすれば、民族の肖像図は、その後に模写した人物によって書き加えられたものであるとも考えられる。あるいは、上程されたオリジナルな地図のほうに民族の描写があり、模写されたほうが民族の肖像の部分に欠落させたのかもしれない。

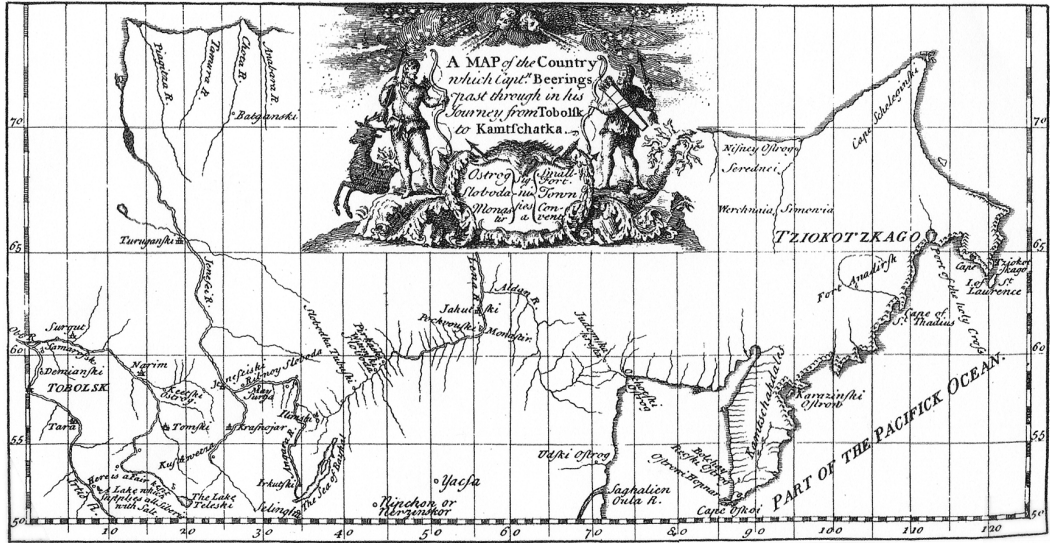
そこで、図1・図3・図4における民族の肖像図を比較してみると、これら3つの地図に描かれている民族の肖像がすべて同じではないことが指摘できる。図1の(8)カムチャツカの女性は、図3・図4にはない。また、図3のヤクートの左側にあるサモエードの肖像図は、図1・図4にはない。つまり、図4がもっとも肖像図が少ないということになる。

それぞれの細かな色彩の特徴などについては、残念ながら、比較はできない。しかし、筆者はゲッティンゲン大学所蔵図を実見した際に、少なくともロシア歴史博物館の所蔵図よりは紙質も上等で、描き方など格段に丁寧で美しくあり、ロシア当局に上呈された地図に近い形態なのではないかと考えられた。ここで、シベリア民族の図像に限って



(Ефимов, А. В., (ред.) Атлас географических открытий в Сибири и в Северо-западной Америке XVII-XVIII вв. Москва 1964, No. 65 より引用)

図5 スウェーデン国立図書館所蔵のシベリア図



(秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』、北海道大学図書刊行会、1999年、V-4図より引用)

図6 ダンヴィルのシベリア図(1732年作製、1735年デュアルドの『シナ帝国誌』所収図)

言えば、(現段階では実見できていないが)実は明らかに、ストックホルム所蔵図のほうが写実的である。ロシア歴史博物館所蔵のA図・B図ともに、図像の描き方は非常に素朴であり、他の2つよりも絵画的な専門性に劣るといえるかもしれない。

どのタイプがオリジナルに近いのか、残念ながら、現段階では確証はない。ただ、図1にはないが、図3・図4には地図の左上に地図の表題が書き込まれている。また、図1・図3にはロシア帝国の象徴である「双頭の鷲」のエンブレムも描かれている。もちろん、ロシア皇帝に献上された地図には、ロシア帝国の紋章は描かれていたに違いない。ただ、もし、ストックホルム所蔵図が、バグロフによってロシア革命の際に外国に持ち出されたものであるならば、描かれていたロシア帝国の紋章を消去してしまう可能性はある。しかし、現段階ではこれは想定しづらい。やはり、18世紀前半のペテルブルクにおいて、誰かによって模写されたものがスウェーデンの図書館にその後所蔵されたのではないだろうか。

この推論を補足するとするならば、パルクヴィストの地図帳の掲載図およびスウェーデンのウプ

サラ大学図書館に所蔵されている1673年にモスクワで作製されたシベリア図の2枚の模写図のケースが参考になると思われる<sup>(41)</sup>。前者は、スウェーデンの陸軍士官であったパルクヴィストがモスクワ滞在中に模写した図、後者はスウェーデンの歴史学者・言語学者であったスバルヴェンフェルトがやはりモスクワで模写してスウェーデンに持ち帰った図であった<sup>(42)</sup>。つまりこれらの模写図は、いずれも、ロシアを訪れたスウェーデンの知識人層による模写図であった。

これらのことを総合して推定すると、やはりロシア国立博物館に所蔵されているA図は、他の2つよりもさらに後年の複製であると思われる。つまり、よりオリジナルに近いタイプは、ゲッティンゲン大学所蔵図(図4)とストックホルムのスウェーデン国立図書館所蔵図(図5)であると考えられる。

#### IV. シベリア図と「民族地図」の系譜

ロシアの「人種地図」(Этнические карты)「民族地図」(Этнографические карты)の研究を行ったプサンチンは、第1次カムチャツカ探検の成

果であるチャップリンのシベリア図とその複製図は、ロシア地図史における第一段階の「民族地図」であると位置付けている<sup>(43)</sup>。その重要な理由として、すでにⅡ章で述べたシベリア諸民族の物質文化の諸要素が当該地図に描かれていることが挙げられている<sup>(44)</sup>。

プサンチンによるロシアの「人種地図」「民族地図」に関する近年の研究は、ロシア地図史研究にとって注目すべき業績であるので、本地図に関連した部分のみであるが、ここに紹介したい。

この研究では、ロシアの歴史アトラスおよび現在のアトラスの両方に頻繁に見られるロシア国内における人種・民族の分布地図について、改めてその地図史上の意義を論じているところに特徴がある。プサンチンの定義では、「人種地図」とは、過去および現在における民族の分布の特徴を示し、「民族地図」とは、伝統的な物質的・宗教的文化を伴った民族を地図上に描いたものとされる<sup>(45)</sup>。「人種地図」のほうが「民族地図」よりも包括的な概念を示しているといえる。

ロシアの「人種地図」の発達は三期に分けられる。第一期は、17世紀末から19世紀前半までの時期であり、固有性の存続であり、人種分布を明らかにすることによる境界画定作業のひとつでもあった。第二期は、19世紀半ばから1930年代までである。学術的な地図作製の発展期でもある。この時期の「人種地図」の発展には、ロシア地理学協会の活動が大きな貢献をした。第三期は、1940年代から現在までであり、いかに学問分野として、「人種地図」を科学の方法と構成で仕上げていくかが問われている時代である<sup>(46)</sup>。

「人種地図」のひとつの形態である「民族地図」のもっとも初期の地図として、レーメゾフのシベリア地図帳のなかにある第23図が有名である<sup>(47)</sup>。しかし、レーメゾフの地図の場合は、各民族の分布は示しているものの、絵画的表現はない。つまり、すでに指摘されているように、本稿で対象とした第一次ベーリング探検の成果であるチャップリンのシベリア図は、シベリア・極東の先住民族の肖像や分布、文化の特徴が地図上に直接に絵画

的に表現されているロシア地図史上、最初の地図図であるといえる<sup>(48)</sup>。

さらに、チャップリンのシベリア図は、18世紀前半における帝国ロシアの知識人層によるシベリアの諸民族への「眼差し」が表現されている事例でもあると筆者は考える。このような「眼差し」が生まれてきた背景として、当該期におけるドイツから輸入した地理学および民族学がロシアにおいても定着し発展したこと、そして、プサンチンが「人種地図」「民族地図」を取り扱うのは、地理学者なのか、民族学者なのか、と問うているところに重要な鍵があると思われる<sup>(49)</sup>。これについては稿を改めて論じたいが、ペテルブルクの知識人層の「未知なる土地」への地理的知識の希求こそが、ロシアの地図文化を発展させてきたということとは述べておきたい。

## おわりに

ロシア国立歴史博物館所蔵のシベリア図が、チャップリンの自筆である可能性は低いと思われるものの、クラシリニコフの複写・作製か、あるいは誰が複写したのか、という問題については、本稿では解決できなかった。しかし、地図自体はあくまで後年の複製であり、地図資料として活用したもののひとつであると推察される。

ベーリングの報告書に付されて提出されたシベリア図（1729年作製）のオリジナルそのものは失われてしまったようであるが、1729年作製の手書き地図が、やはり手書きによる模写を繰り返され、数々のバリエーションを産み出すことによって、18世紀後半まで、シベリアおよびカムチャツカの地域情報のひとつとして生き続けたといえる。

そして、測地技師達の作製したいくつかの地図を基礎資料として新しい「編集図」を作製し、さらに次の地図作製に利用していくことは、当時の知識人層のロシアの地図作製のひとつのあり方であったことは、間違いのないであろう。また、18世紀前半のペテルブルクの知識人社会のなかでは、これらのシベリア・極東の地図の複製を作製する

ことによって、当時の最先端の地域情報を所有する動きもあったのではないだろうか。本稿で扱ったシベリア図の「手書き地図」(複製図)の存在は、当該期における知識人社会のコンテクストから考えていく必要がある。

そして、チャップリンのシベリア図は、18世紀後半までの数々の探検や1779年クック探検隊作製の地図の成果などにより、チュコト半島も書き替えられ、新しい地図が作製されていくことによって、資料としての同時代的な価値もなくなっていったと思われる。その後、ベーリングの第一次探検の報告は、1847年になって初めてロシア国内で印刷され、広く活用できるようになった。

本稿の課題である「出版図」なのか、「一枚物の手書き地図」なのか、「測量図」なのか、「編集図」なのか、という問題は、社会における地図の役割を考える上で重要な意味をもつ。従来のロシア地図史研究においては、地図史上有名な地図の存在そのものが注目されてきたため、これらの点についてはさらに検討の余地が残っているといえるだろう。今後の課題としたい。

#### 付記

本稿では、平成15年度在学研究(2003年4月1日～2004年3月31日)ロシア科学アカデミー東洋学研究所の期間に行った調査を基礎とし、その後の補足調査(2008年8月10日～8月24日、2010年9月1日～9月16日)において平成20年度・平成22年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)「17～19世紀におけるロシア帝国のシベリア・極東の地域像」(研究代表者:米家志乃布)の一部を使用した。

地図史料の所在調査・閲覧、文献調査に際しては、ロシア国立歴史博物館地図部、ロシア国立図書館地図部、ロシア科学アカデミー東洋学研究所および地理学研究所、ゲッティンゲン大学図書館、北海道大学附属図書館、北海道大学スラブ研究センター図書室に大変お世話になりました。また、ポスニコフ教授 A. B. Постников(元ロシア科学アカデミー科学技術史研究所所長)には、ロシア地図史研究について多くのことをご教示いただきました。記して感謝いたします。

#### 注

(1) БергЛ. С. *Открытие Камчатки и экспедиции*

*Беринга*, Ленинград. 1935. (エリ・エス・ベルク(小場有米訳)『カムチャツカ発見とベーリング探検』, 龍吟社, 1942年) БергЛ. С. *Очерки по истории русских географических открытий*, Москва, 1946. Ефимов, А. В. *Из истории великих русских географических открытий*. Москва. 1950. Ефимов, А. В. (ред) *Атлас географических открытий в Сибири и в Северо-западной Америке XVII-XVIII вв.* Москва 1964. А. И. Андреев, *Очерки по источниковедению Сибири XVIII век*, Москва. 1965. Bagrow, L., *A History of Russian Cartography up to 1800*, Ontario, 1975. 船越昭生『北方図の歴史』, 講談社, 1975年. Постников А. В., *Развитие крупномасштабной картографии в России*, Москва, 1989. Постников, А. В., *Русская Америка в географических описаниях и на картах 1741-1867 гг.* С-Петербург. 2000. Наврот, М. И., Новый вариант итоговой карты Первой камчатской экспедиции, *Россия + Америка 200 лет*. Государственный Исторический музей, Серия из музейной коллекции Выпуск 1, Москва 1999. 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』, 北海道大学図書刊行会, 1999年. А. В. Псянчин, *Очерки истории этнонической картографии в России XVIII-XIX вв.* Москва. 2004. など多数のロシア語・英語・日本語文献がある。

- (2) エリ・エス・ベルク(小場有米訳)『カムチャツカ発見とベーリング探検』, 龍吟社, 1942年, 141頁。
- (3) 前掲(2)ベルク著書, 103頁。
- (4) 船越昭生『北方図の歴史』, 講談社, 1975年, 129頁。
- (5) ①Ефимов, А. В. (ред) *Атлас географических открытий в Сибири и в Северо-западной Америке XVII-XVIII вв.* Москва 1964, No. 63, 64, 65, 66, С44-46. ②Постников, А. В. *Русская Америка в географических описаниях и на картах 1741-1867 гг.* С-Петербург. 2000, С. 39. ③Наврот, М. И., Новый вариант итоговой карты Первой камчатской экспедиции, *Россия + Америка 200 лет*. Государственный Исторический музей, Серия из музейной коллекции Выпуск 1, Москва 1999, С. 17-21. ④Псянчин. А. В. *Очерки истории этнонической картографии в России XVIII-XIX вв.* Москва. 2004. С. 62-66.
- (6) 前掲(5) ①エフィーモフ Ефимов のアトラスに掲載されている No. 66, No. 136 を参照。
- (7) 前掲(5) ①Ефимов, С. 46.
- (8) 前掲(5) ①Ефимов, С. 92.

- (9) 前掲(5) ③Наврот, С. 17-21.
- (10) 前掲(5) ③Наврот, С. 21.
- (11) 前掲(5) ③Наврот, С. 17.
- (12) 前掲(5) ③Наврот, С. 18.
- (13) 前掲(5) ③Наврот, С. 19.
- (14) 前掲(5) ④Псянчин, С. 63.
- (15) 前掲(5) ③Наврот, С. 19.
- (16) 前掲(5) ①Ефимов, С. 109.
- (17) 前掲(5) ③Наврот, С. 21.
- (18) 前掲(5) ③Наврот, С. 21.
- (19) 前掲(2) ベルグ著書, 96-103 頁。
- (20) 前掲(2) ベルグ著書, 103 頁。
- (21) 前掲(5) ①Ефимов, С. 43.
- (22) 前掲(5) ③Наврот, С. 20.
- (23) 前掲(5) ③Наврот, С. 20.
- (24) 前掲(5) ③Наврот, С. 20.
- (25) 前掲(5) ④Псянчин, С. 65.
- (26) 前掲(5) Наврот, С. 17.
- (27) 前掲(2) ベルグ著書, 105-107 頁。
- (28) 拙稿 Shinobu Yamada-Komeie, Mapping the Russian Far East: Cartography and the Representation of Sakhalin, the Kurils, and Japan in the 18th century, 法政大学文学部紀要第 54 号, 2007 年, pp. 58-62.
- (29) 前掲(5) ①Ефимов, С. 109.
- (30) 前掲(5) ①Ефимов, С. 109.
- (31) 前掲(5) ③Наврот, С. 19.
- (32) 前掲(5) ①Ефимов, С. 45-46.
- (33) 前掲(5) ①Ефимов, С. 45.
- (34) Meeting of Frontiers/Встреча на границах (English-Russian digital library), Digital Collections, The Georg von Asch Collection. [http://frontiers.loc.gov/map\\_item.pl](http://frontiers.loc.gov/map_item.pl)
- (35) Bagrow, L., *A History of Russian Cartography up to 1800*, Ontario, 1975, p. 169.
- (36) 前掲(2) ベルグ著書, 103 頁。
- (37) 前掲(2) ベルグ著書, 103 頁。
- (38) 前掲(2) ベルグ著書, 105 頁。
- (39) 前掲(2) ベルグ著書, 105 頁。
- (40) 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』, 北海道大学図書刊行会, 1999 年, 78 頁。
- (41) 1673 年のシベリア図については, 三上正利「1673 年のシベリア地図」, 『人文地理』16-1, 1964 年, 19-39 頁に詳しい。
- (42) 前掲(41) 20-22 頁。
- (43) 前掲(5) ④Псянчин, С. 66.
- (44) 前掲(5) ④Псянчин, С. 66.
- (45) 前掲(5) ④Псянчин, С. 16.
- (46) 前掲(5) ④Псянчин, С. 14-15.
- (47) 前掲(5) ④Псянчин, С. 41-56, レーメゾフの地図帳所収第 23 図(民族地図と呼ばれる)については, 三上正利「レーメゾフの『シベリア地図帳, 1701 年』の民族誌地図」, 九州大学教養部『歴史学・地理学年報』第 2 号, 1978 年, 5-20 頁参照。
- (48) 前掲(5) ④Псянчин, С. 60-66.
- (49) 前掲(5) ④Псянчин, С. 10-12.



Bering's First Expedition from 1725 to 1730 and Mapping Siberia:  
Analyzing the Copy of Chaplin's map  
in the State Historical Museum in Moscow, Russia

Shinobu Komeie

**Abstract**

In the 18th century, the Russian Empire compiled several maps in Siberia and the Far East in order to comprehend geographical information. Many Russian geographers and historians have studied the printed maps and manuscripts on the basis of Bering's Expedition between 1725-1730 and 1735-1743. The author studied some Russian manuscripts about Bering's expeditions in Moscow.

Bering submitted his expedition report together with Chaplin's map to the Committee of the Admiralty in St. Petersburg in 1730. However, the original map was lost and at present, some copies and variants can be found in Russia, Sweden, Germany, France, Britain etc. Some Chaplin's maps, show rivers and names of places along the travel route of the first expedition of Bering and are based on many other new maps of geodesists in the Russian Academy. The five copies contain pictures representing Siberian native people.

A variant of Chaplin's map in the State Historical Museum in Moscow, in a 1753 manuscript, is not an original map but it is a copied version by an intellectual, who desired geographical information of unknown lands, in St. Petersburg. On this map, the representation of Kamchatka is exceedingly better than the former Russian maps, but the representation of Chukoto Peninsula is left incorrect. The next stage of Russian mapmaking of the Russian Far East began in the latter half of 18th century. The copy of Cook's map has changed shapes of Chukoto Peninsula in Russian cartography.

**Keywords:** Bering's expeditions, Mapping Siberia, Chaplin's maps, eighteenth century, the Russian Far East, Russian cartography